

大学入試の動向

「令和3年度 大学入試の結果と今後の入試動向」

株式会社 大学通信 安田 賢治 氏

初実施の共通テストは志願者減も平均点アップ

初実施となった共通テストは、11都府県に緊急事態宣言が再発令されるコロナ禍の中、厳重な感染症対策の下で実施されました。コロナ禍の影響を受け、センター試験は2回実施でしたが、共通テストは特別に3回に増えました。1月16、17日の本試験を第一日程、1月30、31日に第二日程で、第二日程は第一日程の追試を兼ねています。その後2月13、14日に特例追試を実施しました。これは病気などにより、第二日程を受けられなかった人のための試験です。昨年、3カ月近くに及ぶ学校の休校期間があったため、学業遅れがあった高校生のために第二日程が設けられ、浪人生は第二日程を受けることはできません。

今年の共通テストの志願者数は53万5245人で、昨年のセンター試験志願者数と比べて4%減、2万人を超える過去最大の減少となりました。特に浪人生が2割近くと大きく減りました。20年度からの入試改革を敬遠し、昨年の内に進学してしまい、浪人する受験生が減ったからです。現役生は0.5%減にとどまりました。

しかも、志願者の内、第二日程を志望したのは、わずか718人で、全体の0.13%に過ぎませんでした。学業遅れを取り返した学校が多かったこと、1月30、31日は関西の人気大が入試を実施し、2月1日からは本格的に私立大入試が始まるため、連続受験となることを考慮して敬遠されました。また、最終的に第一日程を病気などで受けられずに第二日程に回ったのは1729人とどまりました。コロナの感染拡大で追試を行う大学もありましたが、それほどの人数にはならなかったようです。東大は2月22日、23日に追試を行い、6人が受験して1人が合格しています。

一方、新傾向となった共通テストですが、問題文が長文になりました。数学Ⅰ・Aの問題冊子は昨年より8ページ、数学Ⅱ・Bは4ページ増で、他でも世界史B、「倫

表1 センター試験と大学入学共通テストの違い

項目	センター試験		共通テスト	最終結果
名称変更	大学入試センター試験	→	大学入学共通テスト	○
	一般入試	→	一般選抜	○
	推薦入試	→	学校推薦型選抜	○
	AO入試	→	総合型選抜	○
問題作成	平均点6割を目標	→	平均点5割を目標	○
英語	2技能「リーディング」200点満点 「リスニング」50点満点	→	ともに100点満点に	○
	「発音・アクセント・語句整序」の問題を出題	→	「発音・アクセント・語句整序」の問題は出題しない	○
	2技能「ライティング」「スピーキング」は試験になし	→	「ライティング」「スピーキング」は民間英語試験の成績利用	×延期
国語	マーク式のみ	→	マーク式に加えて記述式問題を出題	×
数学	マーク式のみ	→	マーク式に加えて数式か短文で解答する記述式問題を出題	×

理、政治・経済」などでも問題文が増えました。今回、出題が見送られた記述式の導入の背景には、読解力のアップがありましたが、他の教科でも問題文を長文にすることで読解力を求めました。

ただ、初実施となった共通テストの第一日程では、31年続いたセンター試験で、わずか2回しか実施されなかった得点調整が公民と理科②の2教科で実施されました。得点調整は、教科の中の科目の平均点差が20点以上になった場合に実施されます。点数が低かった科目に、いわゆる下駄をはかせて得点をかさ上げします。共通テストは初めての実施ということで、出題が手探りだったこともあって各科目の難易にばらつきが出たようです。

新傾向となった今年の共通テストですが、意外にも高得点でした。平均点は下がると思われていましたが、アップしている科目が多かったのです。得点調整後で見ると、入試で採用される主要科目で平均点が下がったのは、国語、日本史B、地理B、化学基礎、生物基礎、英語リスニングの6科目だけでした。大学入試センターから公表されない5教科7科目の平均点も文系、理系ともアップしたと見られます。

今年は難化の予想を覆し、共通テストの平均点が上がりました。平成2年の第1回センター試験の翌年の第2回は、平均点が下がった科目が多くなりました。特に数学I（今でいう数学I・A）は20点以上も平均点が下がりました。2年目ともなると、

表2 2021年 国公立大（左）と私立大一般選抜志願者数トップ20

順位	設置	大学	志願者数	2021-2020	順位	大学	志願者数	2021-2020
1	国	千葉大	11,565	1,353	1	近畿大*	135,979	-9,371
2	国	神戸大	10,236	921	2	千葉工業大*	108,707	5,438
3	国	東京大	9,089	-170	3	明治大*	99,470	-3,565
4	国	北海道大	8,621	-1,131	4	日本大*	97,948	-15,954
5	公	大阪府立大	8,057	-32	5	早稲田大*	91,659	-12,917
6	公	東京都立大	7,758	-127	6	法政大*	90,948	-12,680
7	国	九州大	7,629	388	7	東洋大	89,688	-12,088
8	国	京都大	7,424	-275	8	立命館大*	83,512	-20,157
9	国	富山大	7,231	-81	9	関西大	79,526	-8,099
10	国	大阪大	6,991	-471	10	中央大	78,211	-8,265
11	国	山口大	6,633	1,045	11	立教大*	65,475	4,167
12	公	兵庫県立大	6,502	702	12	龍谷大*	56,379	3,098
13	国	信州大	6,255	-128	13	東京理科大*	49,301	-7,054
14	国	静岡大	6,230	-350	14	専修大	47,103	-3,921
15	国	茨城大	6,213	652	15	同志社大*	44,481	-5,465
16	国	広島大	6,111	-505	16	福岡大	44,072	-8,040
17	公	高崎経済大	5,921	-307	17	東海大	43,258	-13,027
18	国	埼玉大	5,910	69	18	京都産業大*	40,925	-15,295
19	国	東北大	5,750	12	19	青山学院大*	40,123	-17,699
20	公	大阪市立大	5,732	14	20	芝浦工業大	38,071	-2,834

しっかりと受験生の学力を把握しながら出題できるため、問題を難しくすることができたからでしょう。来年の共通テストも今年より平均点は下がりそうです。来年の共通テストの日程についてはセンター試験と同様、本試験と1週間後の追試験の2回実施の予定です。ただ、これも新型コロナ感染拡大でどうなるかは、不透明なところもあります。

コロナ禍で地元志向が高まった今年の入試

共通テスト平均点アップの結果を受け、受験生は国公立大に強気に出願しました。最終的に志願者は42万5415人で、昨年と比べて3.2%減。共通テストの志願者が4%減ですから、諦めずに国公立大に出願した受験生が多かったと見られます。志願者数は前ページの表2のように千葉大が6年連続でトップとなりました。2位の神戸大と2校だけが志願者1万人超えです。しかも、昨年より志願者が増加しています。5位の大府立大ですが、来年は20位の大府立大と統合して大阪公立大になるため、志願者トップに立ちそうです。

ただ、コロナ禍の影響で、国公立大、私立大とも地元大学の人気が高くなりました。感染が拡大している大都市の大学を避ける傾向が強まったのです。逆に大都市の受験生も他地区への受験を敬遠するようになり、地元の割合が高まっていると見られます。国立大で見ると、東大、京大、北海道大など全国区型の難関大の志願者が減り、地元勢中心の東北大、名古屋大、九州大の志願者が増えました。東大の合格者を地域別に見ますと、北海道、東北、北陸、中・四国は減少です。ただ、非常事態宣言が出た府県を含む東海、近畿、九州では合格者は増えていました。感染状況などが志望校選びにも影響したと見られます。早慶の当初合格者で見ても、1都3県（東京、埼玉、千葉、神奈川）からの合格者は、早稲田大が76.8%で、昨年の73.2%よりアップ。慶應義塾大も75.4%で、昨年の73.3%よりアップしています。コロナ禍によって、地元志向が強まっていることの表れでしょう。地方からの志願者が減っています。ちなみに10年前の2011年には、早稲田大は66.9%、慶應は65.1%でした。東京の人気大学でも地元占有率が高まり、関東ローカル化が進んでいます。

一方、コロナ禍の影響で入試方式を変える国公立大も続出しました。早々と大学独自の2次試験を中止し、共通テストの成績だけで合否を決めるとした横浜国立大は、44.7%も志願者が減少しました。今年、もっとも志願者の減った国公立大となりました。二次試験での逆転がないため、最初から受けるのを諦めた受験生も多かったのでしょう。さらに、二次対策を取らなくてよく受けやすいのですが、同時に志望校へのこだわりが薄くなったのかもしれない。過去問などを解けば、解くほど志望校への思い入れは強くなります。また、共通テストの成績が良ければ、志望校への思い入れが少ない分、別の大学に志望変更したことも考えられます。今年になってから入試を変えた大学では、試験時間を短縮して午後入試にした東京外国語大、2次試験を中止して共通テスト利用方式に切り替えた宇都宮大、山口東京理科大はいずれも志願者減となりました。

戦後最大の志願者減、早大は49年ぶりの10万人割れ

私立大は2年連続で一般選抜の志願者が減少し、しかも12%減で戦後最大の減少となりました。表にありますように、ほとんどの大手私立大は志願者減です。志願者ト

ップは8年連続で近畿大でした。志願者が10万人を超えたのは2校だけで、去年は8校ありましたから激減です。2位の千葉工業大は、コロナ不況を考慮し共通テスト利用入試の受験料を無料にして志願者が増えました。

人気の早稲田大、慶應義塾大も、ともに志願者減。早稲田大は3年連続の志願者減で、1972年以来、49年ぶりに志願者が10万人を割り、9万1659人とどまりました。昨年より1万3千人近く、12%強の減少です。慶應義塾大も4年連続の志願者減で、平成以降、最少の志願者数となりました。MARCH（明治大、青山学院大、立教大、中央大、法政大）では立教大だけが志願者増です。立教大は入試改革が志願者増につながりました。文学部の一部の方式を除き、英語を民間英語試験のスコアか共通テストの英語の成績に代え、大学独自の英語試験を廃止しました。さらに試験日を連続して複数回設け、自分の併願プランに合わせて日程を選べる方式を始め人気を集めました。日東駒専（日本大、東洋大、駒澤大、専修大）では駒澤大だけが志願者増で、他の大学はみんな志願者減でした。新しく共通テストに参加した上智大、学習院大が増え、志願者増の大学は数えるほどしかありません。

こうなった理由は、地元志向以外に大きく四つあります。ひとつは受験生数の減少です。少子化により高校卒業者数は、昨年と比べて2.6%の減少でした。それよりも減りが大きかったのが浪人生で、2割ほど減っていると見られます。浪人生は現役生に比べて併願校が多いため、浪人生が減ると私立大志願者数減に直結します。浪人生が減ってしまったのは、今年度から始まった大学入試改革を敬遠し、昨年の内に大学に進学してしまった受験生が多かったからです。浪人しても入試が変わるため、メリットが少ないと判断したからでしょう。

二番目は年内に合格を勝ち取った現役受験生が多かったことです。コロナ禍の影響で、年明けに入試が行われるかどうかかわからず、不安から年内に行われる総合型や学校推薦型選抜で合格を決めた受験生が多かったことです。ただ、志願者は大きくは増えていませんでした。特に総合型選抜では出願資格に当たる様々な活動が、コロナ禍によって制限されたこともあり、出願資格が大学の条件を満たさない場合も多かったようです。さらに、エントリーシートの作成など、在学校の教員の負担も大きく、授業が遅れている分を取り返すのに懸命で手が回らなかった部分もあったと見られます。

ただ、大学側も年明けに入試が行えるのかどうかの不安もあり、年内入試で多めに合格者を出して入学者確保を目指しました。その結果、一般選抜受験生が減ることになったようです。特に指定校推薦入試が人気になりました。

三番目は併願校数の減少です。去年はオープンキャンパスや合同説明会などが開催されず、受験生は志望校の情報収集に苦労しました。オンラインのオープンキャンパスは実施されていたものの、やはり参加はリアルなオープンキャンパスほどではなかったようです。関心の高い第一志望、第二志望は調べていても、第三志望以下、押さえ校などの情報収集の時間がなかったようです。そのため、併願校数が減ったと見られます。また、感染予防の観点から何度も大学に受けに行くのを避け、共通テストの成績だけで合否が決まる方式や、全学部統一試験などを受ける受験生が多くなりました。全学部統一試験とは、全学部が同じ問題で1日に試験を行い、その際に第二志望や第三志望の学部にも出願できる入試です。一度の受験で、何度も合否判定が受けられるわけです。

最後は各大学のコロナ禍への対応です。昨年の大学1年生は急遽、オンライン授業中心に変わりました。前期の授業だけでなく、後期もオンライン授業の大学は、首都圏中心に多くなりました。入学式は中止、1年生がキャンパスを訪れる機会はほとんどなく、健康診断の時だけ行ったとか、全く行ったことがない学生もいました。それだけではなく、クラブ・サークル活動やアルバイトもできず、友人ができない1年生もけっこういたようです。

小中高などでは昨年から対面授業を再開していますが、大学だけがいまだにオンライン授業中心です。自粛というより萎縮が続いています。これが受験生に、地元の大学進学志向が強まっている理由でもあります。受験生にとっては、この4月以降もオンライン授業中心なら、家を離れて大学進学する意味があまりないと考えているのです。新型コロナに感染するのも避けたいとの考えもあります。大学生活は授業を受けるだけではありません。教育は目に見えないカリキュラムにこそ意義があるとも言われます。キャンパスでの友人や先生との対話も大切ですし、課外活動も重要です。しかし、その機会がないとしたら、地元の大学に進学して、実家にいたほうが良いということになります。そこで気になるのが、各大学の4月からのコロナ禍への対応です。入試前に「原則、対面授業」と公表した私立大で、志願者が増えたところが目立ちました。上智大、駒澤大、京都の龍谷大、兵庫の関西学院大などです。入試改革で志願者が増えた立教大も1年生は語学の授業など対面で実施と公表していました。オンライン授業のメリットはたくさんありますが、学生はやはりキャンパスに通って授業を受けたいということでしょう。それで大手大学では志願者が減っているところが増えているとも考えられます。

学部系統別人気トップは情報系

次ページの学部系統別の志願者数の、昨年を100とした時の指数の表を見てください。志願者全体が12%も減りましたから、昨年より増えている系統はありません。2019年、20年の2年間は、理系の人気が高く文系の人気が低い“理高文低”の学部人気でした。ところが、コロナ禍の影響を受けた今年はそれが崩れ去りました。受験生は4年後あるいは6年後の就職を考えながら、学部・学科を選ぶのが一般的です。ですから、不況の時は比較的就職の良い理系、さらには国家資格が手に入る医療系の学部人気が高まります。しかし、今年はこちらともつかず、理系、文系それぞれに人気でした。もっとも人気があったのは、予測されていた通り、「情報・メディア」でした。情報・メディアはAIの発達、ビッグデータの活用など、今後のビジネスを牽引していく期待の分野です。2020年度からは小学校1年生からプログラミングの授業が始まっており、国が教育にも力を入れている分野です。データサイエンティストの育成が急務で、今後も需要が高まり、就職が期待できることもあって受験生の関心が高くなっています。その上、昨年からのコロナ禍で、高校でもオンライン授業がごく普通に行われるようになり、スマホだけでなくデータを身近に活用できるようになりました。そのことも人気に拍車をかけています。

医学部人気もコロナ禍の影響が大いにありそうです。未知のウイルスへの対処、さらに医療現場の混乱など、医療に注目が集まりました。今の高校生は社会貢献の意識も高く、困っている人を助けてあげたいとの思いを強く持っていますから、その点からも人気になったと見られます。

表3 学部系統別人気

学部系統	指数
情報・メディア	94.6
医	93.4
生命科学	92.1
社会	91.1
経済	90.9
理・工	89.7
商	89.7
法	89.4
文・人文	88.6
看護	88.3
(私立大平均)	88.0
教育	87.3
薬	87.1
医療技術	86.5
家政・栄養	83.4
経営	83.0
国際	81.9
外国語	80.7
農	80.6

文系では社会、経済の学部人気が高まっています。経営の人气が下がっていますが、昨年まで人気が高かった反動と見られます。法学部人気もこれまで人气が低迷していたこともあって、安全志向の受験生から狙われたと見ていいでしょう。一方、昨年まで人気の高かった国際系、外国語の人气が急落しました。おそらく、コロナ禍で昨年は留学に行けず、今年もまだ不透明な状況だからでしょう。留学生もまだまだ来日していません。グローバル時代到来は間違いありませんが、いつ留学に行けるのか、さらには留学に行っても感染リスクが高まるのが怖いとの気持ちもあったのではないのでしょうか。さらには観光や航空などの業界では採用を手控えており、就職への不安もあり敬遠されたと見られます。

2022年の大学入試はどうか

来年は共通テスト2年目になります。今年、平均点がアップした分、来年は問題が難化して平均点が下がるのではないかと予測されています。コロナ禍が続き、今年も休校措置などがあれば、入試も変わる可能性があります。ただ、来年の受験生は今年の受験生以上に2年生の時に部活動、学校行事などに参加できていません。総合型や学校推薦型選抜で大学合格を目指すのなら、この1学期や前期に様々な活動が求められるのではないのでしょうか。

資格試験の受検も必要になってくるでしょう。

また、一般選抜を目指す受験生にとっても、2年生の時にオープンキャンパスにはほとんど行けなかった分、3年生の時に参加する必要もあります。今年は多くの大学で、感染状況を見ながらはなりますが、実際にオープンキャンパス開催を企画している大学が多くなっています。入場者数の制限などが設けられ、一昨年以前とは同じにはいかないでしょうが、大学生活をイメージする上でも一度は参加しておきたいものです。学力アップと同時に、志望校選びの情報入手も大切になってきますから、かなり忙しい新学期になるでしょう。

また、今年は私立大で志願者が激減する大学が増加しました。今後、少子化が進みますから、入試は無競争時代に突入していきます。もちろん、一部の難関大には志願者が集中する状況は変わりませんが、それでも以前よりは入試は確実に緩和されていきます。難関ではない大学には、年々入りやすくなっていくことになります。さらに入試の多様化も進みます。一般選抜だけでなく、総合型、学校推薦型選抜の募集人員も増えていくと見られます。文部科学省は、この2選抜にも学力を求めており、同時に一般選抜の受験生にも高校での活動歴などを求めています。入試が多面的評価になっていくことは間違いないところです。高校時代の活動歴を書き込むサイトだったジャパン・イー・ポートフォリオは廃止になりましたが、高校時代の活動を入試の評価に求められる時代になってきています。勉強さえしていればいい、部活動さえしていれば大学に進学できる時代は終焉を迎え、何事にも積極的に取り組む学生を大学は求めています。

